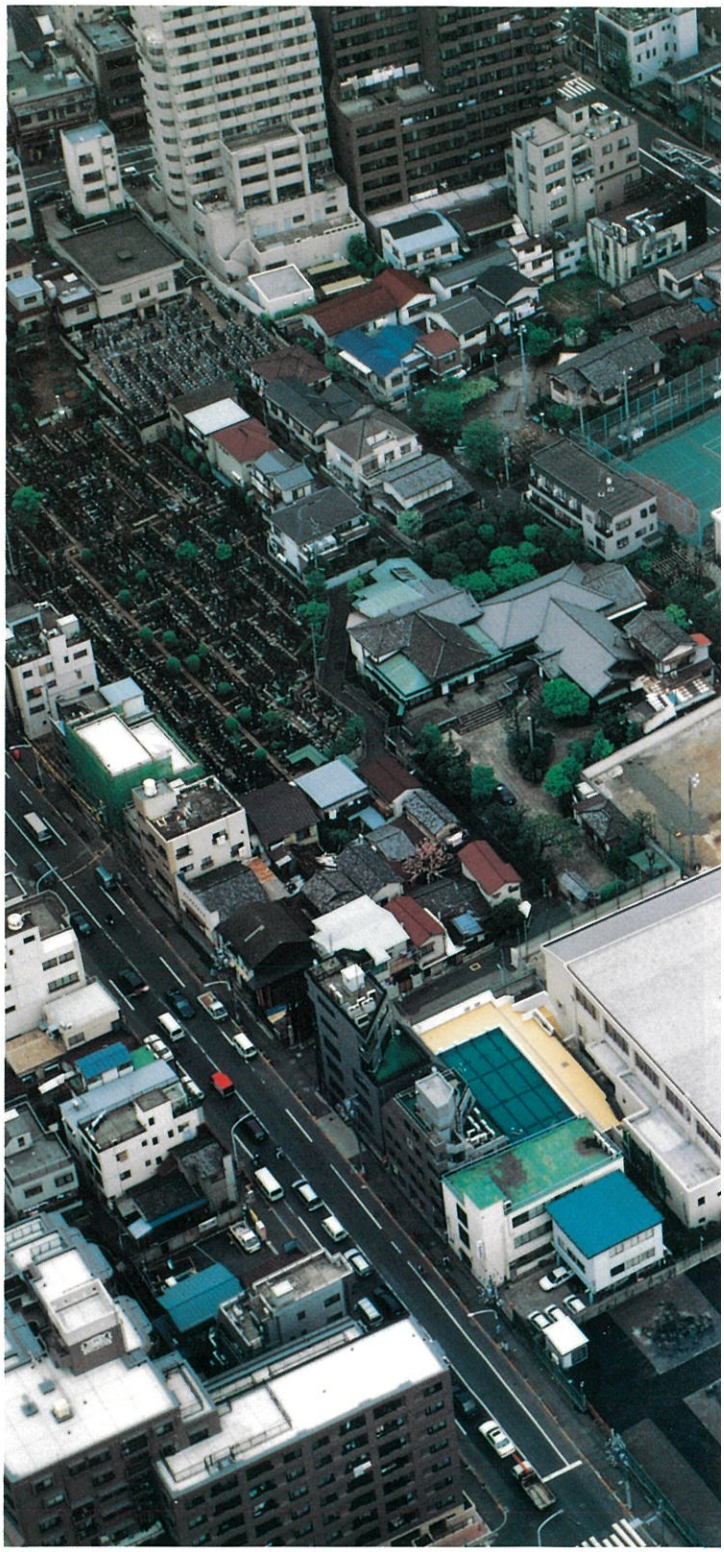
創立五拾周年記念誌

東京都立向丘高等学校

▲校舎改築に際し出土した各種輸入陶磁器

▲新校舎全景 1998年3月

新校舎落成



校訓

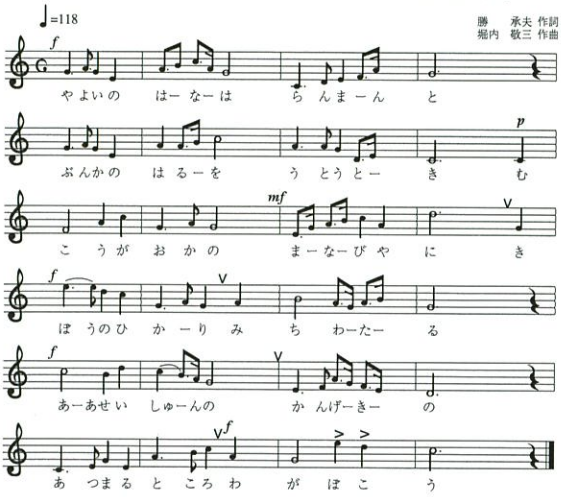
一、自主
一、誠実
一、明朗

▲東面外観見上げ

都立向丘高等学校校歌

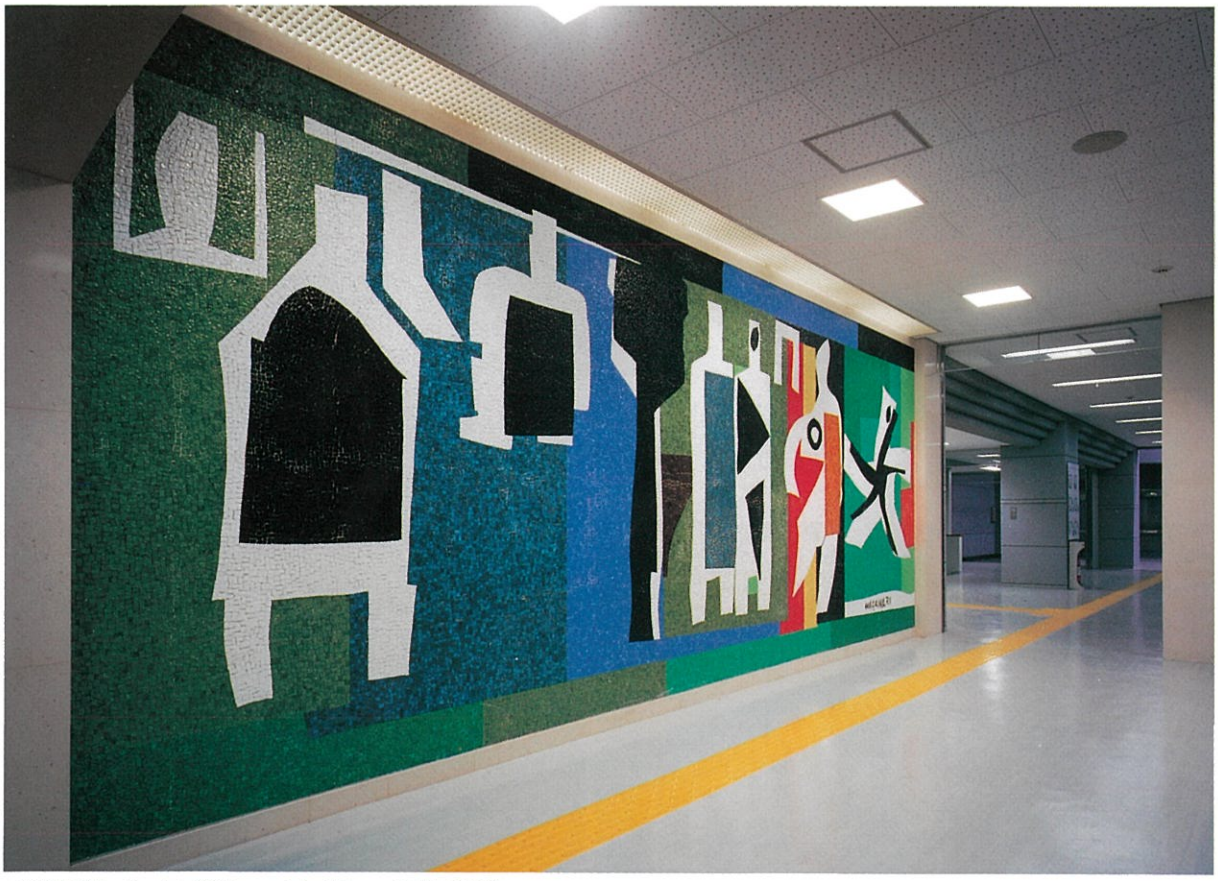
『校章の由来』

本校の開校に備え、統合される二校の美術の教師が校章の原案を百何十種と作り生徒と職員が選んだ。銀杏をあしらったのは、この本郷界隈には銀杏が多いのと東大に直結したような学校になってほしいという願いもあったという。



1．弥生の花は爛漫と
　文化の春を謳うとき
　向丘の学舎に
　希望のひかり　満ちわたる
　ああ青春感激の
　あつまるところ　わが母校

2．自由の空をかけりゆく
　平和の鳥ぞわが姿
　世界につづく友愛の
　道遥かなり　わが前に
　ああ純情のほとばしる
　心の故郷　わが母校



▲玄関壁レリーフ『集い、ふれあい』村井正誠 作

◀生徒玄関

1 階

▲エレベーターホール

▲中庭（光庭）

▲和　室

▼校舎１Ｆ廊下

2 階

▲進路教室

▲コモンスペース（２Ｆ）

▲図書室

▼ＬＬ教室

▲普通教室

3 階

▲調 理 室

4 階

▲物 理 室

5 階

▼マルチメディア教室

▲多目的ホール

6 階

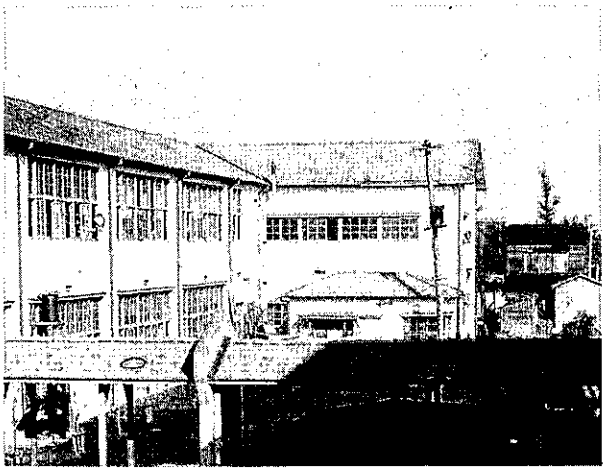
▲化　学　室

▲生　物　室

▼屋　　上

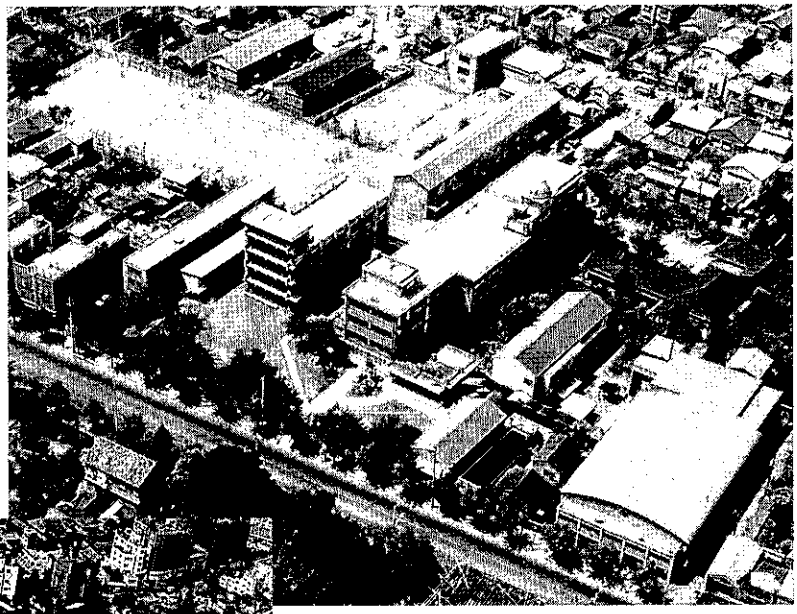
屋 上

ブ校舎の思い出

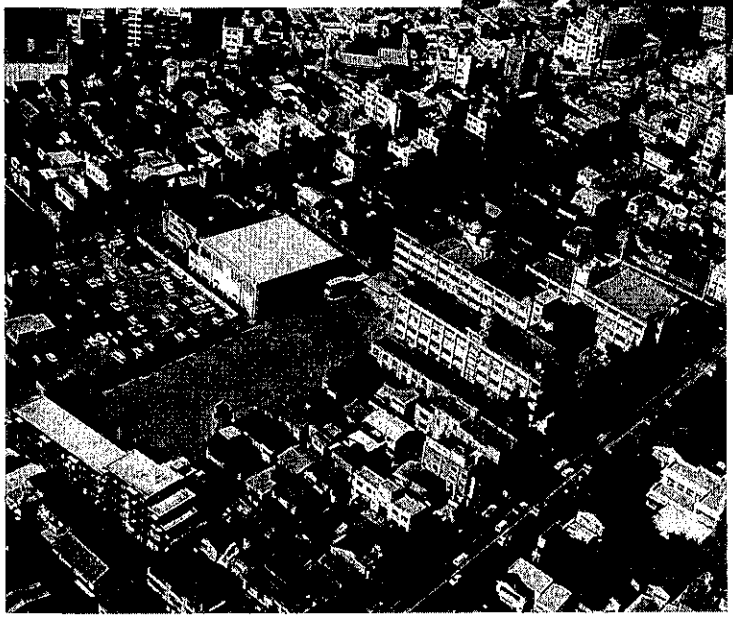


▲1950年（昭和25）年　裏門より旧木造校舎を望む

▲1948年（昭和23）年　旧木造校舎起工式

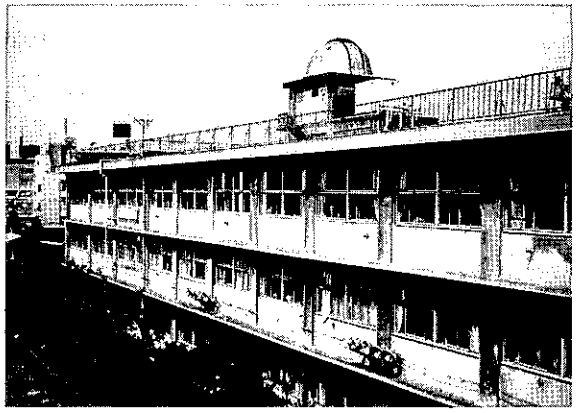


▲1967年（昭和42）年　手前本郷通り



▲1987年（昭和62）年　手前本郷通り

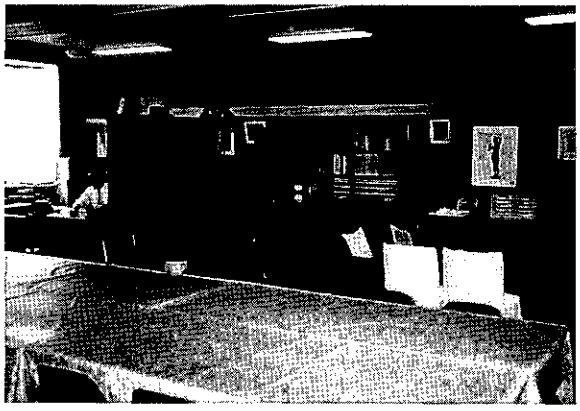
旧校舎・プレハ



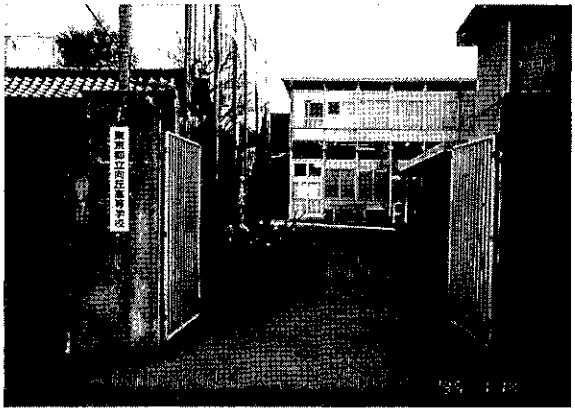
▲一号館より二号館を望む

▲正門より二号館東面を望む

▲職　員　室



▲校　長　室



▲プレハブ校舎時代の正門

▲建設中のプレハブ校舎

都立向丘高等学校
創立五十周年記念誌

目次

グラビア
新校舎落成
旧校舎・プレハブ校舎の思い出

緒言
学校長挨拶……1
祝辞……2

第一部　向丘高校の歴史と回顧
向丘高校前史……8
向丘四十年間のあゆみ……9
向丘この十年のあゆみ……16
五十周年記念座談会……22
回想記“思い出の日・思い出の人”……30

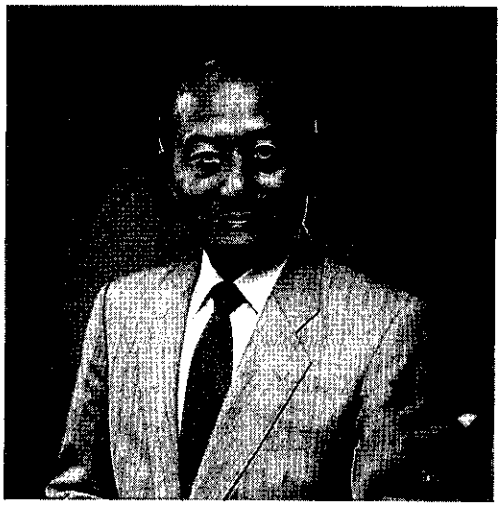
第二部　向丘高校の現況
向丘高校の教育目標と現在……36
新校舎の建設と充実……37
校舎改築に関わって……38
埋蔵文化財発掘調査のこと……39
学校生活の現在……40
学習状況40　進路状況44
生徒会活動45　部活動46
体育祭52　クロスカントリー52
文化祭53　修学旅行54
合宿・合唱祭55　学校説明会56
遠足・映画教室56　公開講座とインターネット導入57
図書館58　新標準服58

第三部　定時制
教頭挨拶……60
定時制沿革……61
教育課程と授業の風景……64
給食68　生徒会活動70
クラブ活動72　校外活動74
回想記……76

第四部　資料編
1　教育目標・指導の重点……80
2　校務運営機構図……82
3　生徒の健康状況……82
4　今春の進路状況……83
5　出身中学校一覧……84
6　卒業生数一覧……85
7　現教職員一覧……86
8　教職員在勤表……88
9　新校舎配置平面図……98
編集後記……100

創立五十周年・校舎落成を迎えて

学校長
北村正生



東京都立向丘高等学校は、ここに、創立五十周年記念の日を迎え、また、念願の新校舎落成がなりましたことは、学校を挙げて大きな慶びとするところであります。

本校は、昭和二十三年四月に、東京都立向丘高等女学校と東京都立本郷女子商業学校が統合されて、東京都立向丘本郷新制高等学校として、文京区立誠之小学校及び区立汐見小学校校舎の一部を借用して開校されました。同年五月には定時制課程設置が認可されました。この年から数え五十周年ということであります。この二校の前身は、大正七年四月創立の東京市本郷区第一女子実業補修学校と昭和十年四月創立の東京市豊島実科女学校であります。統合されるまでには、それぞれが幾度も校名を改称し、昭和二〇年一月には、戦災により校舎焼失、移転を余儀なくされました。昭和二四年、現在の地である文京区駒込追分町に新設された校舎に移転、翌昭和二五年一月東京都立向丘高等学校と改称され、現在に至りました。その間には、大戦前後の筆舌に表し難いご苦労、戦後の混乱の中での再出発と学制改革による新生都立向丘高校の誕生、学校群による選抜制度の導入、全都的な高校紛争、グループ合同選抜制度の実施など、実に様々な出来事があり、その歩んだ道は必ずしも平坦ではありません。

その間、激動する内外情勢の中で、本校は、歴代校長、教職員の絶えざる熱意と努力、同窓会、保護者の方々、地域の皆さまのご協力を得て、良き校風を養い、伝統を培いながら逞しく成長してきました。創立以来の苦難の歴史を振り返る時、正に感慨無量のものがあります。

本校の校訓は、「自主・誠実・明朗」です。創立以来五十年の間、本校は教職員と生徒との深い信頼関係をもとに、個性を尊重した闊達な雰囲気を続けてきました。途中に埋蔵文化財の発掘調査が入りましたが、都財務局・都教育委員会のご尽力により、近代的な素晴らしい校舎が今年一月に完成しました。今、向丘高等学校の生徒たちは、すばらしい環境の中で、明るく、素直に、伸び伸びと快適な学校生活を送っています。

今日、わが国は国際化、情報化、高齢化など大きな社会変化の時代を迎えております。本校のあらゆる教育活動を通して、この素晴らしい素質を持った生徒を、二十一世紀を担う人間にふさわしい、知性と意欲に富んだ逞しい人間、他人の痛みが分かり、相手の立場に立って考えることのできる、優しい心を持った人間に育てたいと念願しています。

教育は未来からの呼びかけに応える営みです。五十周年を単なる懐古的なものではなく、良き校風と伝統を継承し、夢が抱ける学校、夢が実現できる学校、チャレンジ精神が発揮できる学校をめざし、新しい時代への飛躍の礎にしようと、教職員一同決意を新たにしております。今後とも、関係各位の格段のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

創立五十年に寄せて

第５代校長
石　　章二郎

創立五十周年誠におめでとうございます。衷心よりお慶び申し上げます。本校は初代校長事務取扱の宇野哲人先生（東大名誉教授）の発意による校訓、自主・誠実・明朗に則った教育方針の下に、歴代の校長を始め多くの教職員の弛まざる努力により、都下優秀校に数えあげられるようになった五十年であったと思います。

私は校長として赴任した当時から(昭和三十八年四月)、高校教育は充実した図書館と体育館さえあれば大半の教育は達成できるとの信念を持っていたが、当時図書室はありましたが体育館はありませんでした。そこでＰＴＡに相談したところ、ＰＴＡは早速動きだし、ＰＴＡ債的なものを発行し建設費調達に取りかかりました。建設地の隣接地（五十一坪余）を都に買収してもらい建設に取りかかりました。当時都立校長会は都費で体育館建設の陳情をしていた四校に半額補助の予算を獲得できたのもＰＴＡ努力によるところが大きく、演劇もできる体育館兼講堂も出来上り、爾来学校行事などに利用され大きな成果をあげています。

また同窓会である「やよい会」は会員一万五千有余を擁し事あるごとに絶大な協力をしている。学校・ＰＴＡ・同窓会は夫々の自覚の下に三身一体となり、向丘高校の充実と発展とに努めており今後は期して待つべきものと信じます。

向丘高校を愛するすべての方々の御多幸と御発展をお祈り申し上げ祝辞と致します。

創立五十周年に寄せて

第６代校長
佐々木　益　男

私が在任中、まことに光栄なことに、創立二十周年記念式典を執り行い、記念誌を発行する栄誉に恵まれました。その時、初代の校長宇野哲人先生宅に和田先生とお伺いし、記念誌に御寄稿下さるよう御願いしました。

「去る五月八日佐々木校長和田先生お二人御来訪、今年は向丘高校創立二十周年に当り、九月二十三日に記念式挙行の予定ゆえ、記念誌上に予の文をとのお話、予は既に老齢九十三、もはや久しく執筆せざれども、向丘の薦めに辞退し難く、創立当初の想い出を認めて責めを塞ぐこととする」と書き出された原稿を後日お届けいただいて感動したことを思い出します。

それから三十年、今年は五十周年に当るとは！まことにars longa, vita brevisという外ありません。私も年九十一才、ペンを取ること多くありませんが、宇野先生と同じ思いで、この文を書いています。テニスンの「小川」の詩の一節に「人々は来たりまた去りゆく　されど我はとわに流れゆく」とあります。

この五十年、向丘高校に人々は来、そして去ってゆく。向丘の流れに浴し、また、流れを美しく清くたくましいものにしようと努力し、来る人々を、清らかに美しくたくましくして去ってゆく。こうして向丘はまた五十年、人々をむかえ、送り、流れ続けることでしょう。

光輝堂々五十周年を祝す

第11代校長
平塚　寛次郎

都立向丘高校がここに創立五十周年を迎え多くの人々の祝福を受けて記念式典を開催されますことは誠に慶賀に堪えません。私も旧職員の一人として心からお祝い申し上げます。　いまや、高校としては稀に見る立派な六階建ての校舎が輝くばかりに完成し、三基のエレベーターをとりつけ、コンピューターをはじめとする近代的施設設備を整えるに至っております。これひとえにＰＴＡや同窓会のご協力のもと、地域社会の方々にも愛され、さらに都関係ならびに各種関係の方々から寄せられた温かいご支援によるものであります。

今回の校舎新築に際し、貴重な埋蔵文化財保護のため工期が延長され、時の北村透校長はじめ教職員生徒の皆さんは仮校舎で苦労なさいましたが、深い歴史に支えられ新装成った光輝堂々の向丘高校に文化の春を謳う思いがおありのことと存じます。これを引き継がれた北村正生現校長はじめ全職員生徒の皆さんの心意気もひたひたと伝わってまいります。都内でもひときわ高い入学倍率を突破して入学した生徒諸君は幸いにも五十周年にめぐり合ったことを機にいっそう勉学に運動に精進されるものと信じております。

これからの世の中は、校歌の示すように、「世界につづく友愛」の時代であります。先輩に続きここを巣立ちゆく方々が国際社会で大いに活躍されんことを願ってやみません。

創立五十周年にあたり向丘高校がますます発展されますよう心よりお祈りいたします。

友のために私を生かす

第12代校長
新城　昇

五十年というのは、重い節目である。

宇野哲人東京大学名誉教授が初代の向丘高校の校長になったのは、向丘高女と本郷女子商の合併という異例の状況と深い関係があったことが想像される。

ともかく、文京区で四番目の普通高校と普通・商業・被服の三教科の定時制高校が発足したのだ。その後、戦後の復興と発展に、多くの人材が社会に送り出されていった。

私が校長であった四十周年行事の近くで実施された、当時の定時制出身者の同窓会総会は、まったく感動的再会の渦であった。

昼間は生きるための仕事、夜は疲れた身体に鞭打っての勉学、互いに助け、励まし、慰め合う教育の原型の存在が感じとれた。

恐らく、全日制の大先輩が集合したら、同様の感激シーンが再現されたことであろう。

全日制の小川同窓会長も、カムイングホームに努力しているのは、全日制の生徒達にこの感激を体験させたい強い願いがあるからなのだろう。他人のためにも努力を傾ける。

向丘高の生徒諸君。自分のことばかり心配しないで、「他者実現」を心がけたらどうだろうか。こころから友人のために考え、努力する。自然に「自己実現の道」が開けよう。

五十周年を祝う

第13代校長
池永武昭

都立向丘高等学校の創立五十周年・校舎改築落成を心からお慶び申し上げます。

一口に五十年と申しますが、半世紀の間には、戦後の教育制度の改革、科学技術の進展に伴う産業や経済界の構造的変化、国際化、情報化、高齢化、少子化現象、バブル経済の崩壊等々、正に激動の時代でありました。

戦後、我が国は、「先進国に追いつけ追い越せ」を合言葉に高度成長を遂げましたが、余りにも物や金が先行し、心の荒廃が目立つようになり、改めて教育の重要性が問われています。人間としての在り方、生き方や、世界から信頼される国づくり、人づくりを如何にするか等、課題や問題点が山積しています。幸い本校では、特色ある学校づくりの一環として、情報化時代を先取し、コンピュータ設備を駆使した最先端のCAI授業を実施し成果をあげてきました。また、「自主・誠実・明朗」の校訓のもと、心豊かな生徒の育成にも努力しました。今も良き校風の一つとして息吹いていることを嬉しく思います。

校舎の改築では、東京都をはじめ、関係各位の絶大なるご支援を賜り、特に校地に隣接している土地に仮設の校舎を建築させて下さった地主の漆原徳蔵氏、漆原徳光氏の教育に対する深いご理解とご援助に衷心より感謝と御礼を申し上げます。五十周年は一つの区切り、通過点です。新しい歴史の構築に向かって、益々のご発展と飛翔を祈念し、祝辞といたします。

創立五十周年を祝して

第14代校長
北村　透

東京都立向丘高等学校創立五十周年を迎えるに当たり、心からお慶び申し上げます。

創立以来、初代宇野哲人校長の「自主・誠実・明朗」の校訓を掲げ、自由闊達、進取の気性の校風が確立され、歴史と伝統を守り続けて、半世紀の道を歩んできました。

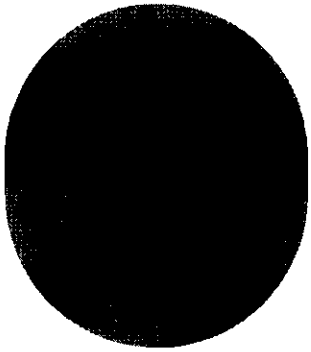
その間、幾多の校舎改築が行われましたが今回は、校舎改築工事の発掘現場で発見された江戸時代の遺跡から明時代の中国で作られた高級陶磁器（景徳鎮窯）が大量に発掘され話題となりました。一部は東京江戸博物館で展示される程の宝物が埋れていたわけです。その上に、新しい時代を象徴する姿の校舎が本郷通りに堂々とそびえ立ちました。

二年後に迎える二十一世紀にふさわしい施設設備と共に、情報化時代を先どりした、インターネットを他の都立高に先がけて導入しネットワーク化に入っています。

時代を先どりするためには、人の見方・物の見方・考え方が大切です。輝く校舎で、輝く人に学び、輝く考えを身につけ、変化の激しい社会に生き抜く力をつけてほしいと願っています。

この五十年の歳月は、単なる向丘高等学校のあゆみを知る上での節目ではなく、先輩諸氏が築いたよき伝統とすぐれた教育実践の足跡をさらに発展させる良い機会でもあります。今後とも地域に輝く学校として、益々発展されることを心から祈念申し上げましてお祝いの言葉といたします。

創立五十周年を祝して
生徒の皆さんへ



全日制ＰＴＡ会長
奥　山　久美子

東京都立向丘高等学校創立五十周年を迎え心からお喜び申し上げます。新校舎も完成致しまして益々の発展をお祈り申し上げます。

生徒の皆さんはどういう気持で向丘高校を選ばれたのでしょうか。プレハブ教室で学校生活を送るのは面白そうだから、コンピュータの個別学習は楽しそうだ、中学校の時の制服でも良いというおおらかさから、一人一人違う意志で選んだことでしょう。以前テレビでこんなお話がありました。絵を描くことが大好きな少年は将来画家になりたくて高校受験に際して絵画科を持つ高校へと進路を決めたかった。しかし、両親に厳しく反対されて窮地に落ち込んだ。その時、中学校の美術の教師が「昔から絵を描いて世間に理解されず、恵まれなかった絵描きが沢山いた。どん底生活を続けながらでも絵を描き続けた。彼らは自分のやりたいことに対して地球の奥深く皆の目には触れない所で強く燃え続けるマグマのようなものを持っていたのだ。」と言う。少年は「僕にも絵を描き続けていけるマグマがあるんだ。」と言って普通高校へ進むことにしたのです。絵に限らず自分に置き換えると考えられることもあるのではないでしょうか。

皆さんにも心の奥底に純良な燃えるマグマがあると思います。向丘高校は心のマグマを受け止めることが出来る自由な校風の学校です。自ら考えて、大事なこと、得意だと思うことを向丘高校で思い切り学んで下さい。そして皆さんの努力が後輩に受け継がれて行くのです。

創立五十周年に寄せて

定時制ＰＴＡ会長
中　島　好　枝

創立五十周年誠におめでとうございます。新校舎も完成し、二重の喜びでございます。五十年と言葉にしますと一言ですが、振り返えりますと、大変素晴らしい偉業だと、深く感銘致します。

私の娘中島法子十八才は、定時制四年生でございます。個人で言えば四年ですが、本校向丘高校は、幾年月という年輪を重ね、教師・生徒・父母・地域・文京区・東京都が一体になって向丘高校の特色を多くの方々の手で真心で守り支え続けて五十年の節目を迎えたのだと思いますと、何んて素晴らしい人間愛でしょう。人間教育の愛によって築き上げた文化・教育の素晴らしさに私の胸は熱き思いでいっぱいです。人間でしか出来ない「人間教育愛」が築き上げた五十年の節目を、向い来る新世紀へ「人間教育愛」の団結の輪で、向丘高校の新たな歴史を刻んで行かれます事を心よりお祈り申し上げて、本日の御祝の言葉とさせて頂きます。

同窓会十年の足跡

全日制同窓会（やよい会）会長
小川力洋

私は昭和六十年からこどもの関係で豊島高ＰＴＡに呼ばれ、当時の全国高等学校ＰＴＡ大会が鹿児島・札幌と開かれ、両年共参加しました。特に札幌大会のとき、手塚校長・澤田会長と同室にて一宿一飯で、ご縁が始まりました。母校では毎年四月二十九日が同窓会日と聞かされ、参加を促がされました。

六十二年の総会後の役員会で会長に指名されました。同僚の応援で組織作りを開始。同窓会活動とは何を成すべきか検討しました。

①総会の周知と勧誘　④会員同士の交流　②母校の現状広報　⑤会費の効果的活用　③卒業生名簿の確立

以上の事柄を重点目標とし、まず会報作りを進めました。そして会員への送付を考えた時、宛先が問題となり、何んとしても総合名簿作りへと余儀なくされました。八方検討の上、ノンリスクと諸好条件と見て、業者決定を行い待望の第一弾が平成二年に発刊されました。又、本年五十周年を機し三月第二弾を発刊することができました。

今年三月二百五拾八名の新卒者を迎え一万五千五百二十二名が卒業者総数となりました。毎年一回の発行で第九号誌を一万部印刷し、全国の住所判明会員宛約九千通発送と現役等に配布し、唯一のコミュニケーションの場として、貢献できているものと信じております。今後は総会、懇談会と、母校の向陵祭＝学校訪問（九月下旬日曜日）を定着いたします。人格形成期にお世話になった母校に感謝！

創立五十周年を祝して

定時制同窓会会長
小川義夫

創立五十周年おめでとうございます。

新潟県の辺鄙な郷里から上京し、今も身を置く箔押業界に就職した私が、向丘高校の定時制に入学したのは昭和二十九年のことでした。戦後の混乱から抜け出し、世の中の動きも漸く軌道に乗り始めた時期でしたが、激しく動く長い社会生活を経験したあとで顧みると、向丘高校の四年間が如何に大切な時であったか、今更のように感じます。

それぞれ違う環境の中で働く仲間たちが、ここに集まり、学び、語り合う事でどんなに沢山の励ましや、安らぎを得たことか。生涯の師にめぐりあい、いつも手を差しのべあえるかけがえのない先輩や仲間を得、今も深い交流が続いていることをどんなに感謝し、誇りとしても足りない思いです。

五十年といえばずいぶん長い時間です。世の中の変化の早さも驚くばかりです。私たちが学んだ木造二階建ての校舎はエレベーターを持つ高層の鉄筋に変わりました。いい教育環境が整うのは素晴らしいことです。しかし、だからこそ、この学校の伝統を育ててくれた諸先生、先輩たちの努力を忘れてはならないでしょう。その伝統の上に、新しい校舎にふさわしい新しい時代の、新しい後輩たちが学び、人間らしい心のつながりが積み上げられればいいと願います。